日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

米国フロリダ大学看護学部カリキュラムと実践学部運営のクリニックの効果：報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮林, 郁子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000133

著作権は本学に帰属する。

米国フロリダ大学看護学部カリキュラムと実践
学部運営のクリニックの効果

報告

Curriculum and Practice at the School of Nursing, University of Florida

A report

宮林　郁子

Ikuko Miyabayashi

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

Ⅰ．はじめに

21世紀の大学像として、学生の海外留学の推進、大学間の国際交流、研究交流の推進が文部科学省から提言されて久しい。また平成4年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の制定の背景には、慢性疾患の蔓延、高齢化、科学技術の高度化といった社会の変化に対応できる看護職への要請、グローバル化時代の進展に伴い、国際的視野に立つ看護学教育の検討がすすめられている。

Ⅱ．フロリダ大學について

今回報告するフロリダ大学との関係は筆者の前任校時代から国立大学の教育改善促進の一環として、交流を進めてきた経緯があったが辞任後は引き継ぐ者が無く、そのままになっている状態であった。フロリダ大学ゲインズビル校はフロリダ大学の本校であり、大学の総面積、学生数、教職員数、学部、大学院の専攻課程数等は他に類をみない程の大規模なキャンパスである。看護学部も昨年度より新しい建物に移って益々キャンパスの大きな位置を占めている。School of Nursingは学部、大学院（修士、博士）を持っている。他の看護系大学がそうであるように北米の看護大学は学部は勿論、大学院修士課程、博士課程も臨床指向である。これをサポートする教官の働き方をみても50％が臨床で実践のフィー

ルドをもっている。これもプログラムが臨床指向を高める理由の一つと言えよう。在宅や地域も看護と云う名前がつけばそれは臨床看護の延長線上にあると捉えられている。そのため看護の基礎教育である学部教育を充実させている。

Ⅲ. 学部運営のクリニック

今回は大学教育の地域への積極的アプローチとして、看護学部、薬学部、医学部、医療学部、心理学部の協働で運営されている地域診療所について報告する。そこは各学部学生の臨地実習の場でもある。学部のバックアップがあっての上ではあるが、それぞれの教官がフィールドを開拓して実習の場をつくっている。地域診療所は地域のニーズに合った実践の場及び、実習の場という看護教育の社会への貢献を視野に入れた学部目標が見事に具現化されている。看護教官は診療所にオフィスを持ち、患者を診る。対象は小児から老年まで、内容も健康相談から Common Disease を持つ者の診療までさまざまである。

またヘルスプロモーションに関する健康教室、トレーニングプログラム、Peer グループなどの活動も展開される。

ここで指導にあたっていた教官は殆どが専門看護師で、処方もできるので、学部学生だけでなく修士課程の学生の臨地実習も行っている。原則はアポイントメント制だが地域性を考慮してウォークインでも受け入れている。費用も一般医療機関と比較すると格段に低い。

これは提供者が大學教員あるいは職員であるために実費さえ捻出できれば、人件費はかからないからである。大体その学期に臨地実習のある担当教官が2人から3人程交代で入っているようである。この診療所の開設で保険を保持しない患者が救急外来へくる割合が減った。 つまり今まで大学病院が負担していた救急外来における処置費の削減に繋がっているということである。救急外来における医療費未払いが病院全体に及ぼす影響は小さくはなくなってきている。この診療所の開設が保険を持たない人達が多く住む地域になされたことは先を見越しての計画であったことは間違いないようである。

大学院学生（修士課程）がこのような場へスムーズに入れる理由は学生のモティベーションもさながらその入学時の資格にもあると思われる。それらは看護師免許、看護師臨床経験、看護学士を持っていることが条件であるし、さらに看護学部の専門科目における試験の平均点がB以上（80点）の評点であることが要求されている。こうした基本的な条件は大学院開設以来どこの大学院でもほぼ同じで変わっておらず、このレベルを維持していくことによって教育の水準を維持し、質の高い看護師を養成しているのである。

Ⅳ. 終わりに

日本の看護教育は米国のそれと比較すると、多くの問題が山積みしているといえよう。

看護教育が急激に大學化され、専門学校卒業生にも門戸をひらいたことは喜ばしいことであるが、編入後あるいは入学後に充分ケアが行き届いているとは考えにくい。つまり編入生、大学院生に対して其々のニーズに合わせたガイダンスができているところは少ない。また大学院入学資格についても現行のままでは、臨床看護師の基礎をつくる学部教育が軽んじられるようなシステムになっている。看護教育がプロフェショナル教育であることが、忘れられているようなところがある。

本調査はその一部を平成15年度学内奨励研究助成をうけて行った。
本調査についてはProf.Castlemanのご協力とご指導に深謝いたします。